

コンケン大学日本語教育ワークショップの成果と課題

長田佳奈子、武井康次郎、Jaranya CHUMYANGSIM、Watchara SUYARA

1. はじめに

コンケン大学教育学部日本語教育課程（以下、TJL_KKU）は、2013年3月現在、創設9年目のプログラムであるが、中等教育機関の日本語教員養成のみならず、東北タイの日本語教員をサポートする役割を担っていくことが期待されている。そして、そのために、TJL_KKUと中等教育機関の日本語教員のネットワークを構築していく必要がある。

タイには、タイ国日本語日本文化教師協会（以下、JTAT）をはじめ、いくつか日本語教師会があるが、東北タイには2013年3月現在、教師会がない。イーサーン日本語教師の会⁽¹⁾やウボンラーチャターニー日本語教師の会⁽²⁾が活動していた時期もあるが、中心になっていた日本人教員の離任とともに、立ち消えになっていった。1995年から活動している北タイ日本語教師会も2012年度より実質活動を休止している⁽³⁾。教師会という形でネットワークを組織化しようとする、ボランティアで組織をまとめるリーダーや、広報、会計等の担当者が必要になる。しかし、東北タイという広大な地域には日本語教育機関が散在しており、定期的集まることは難しい。集まるにしても、交通費、宿泊費が伴うし、日本語教員はそれぞれの通常業務で多忙を極めている。このような状況下でも、ニーズがあれば、教師会のようなものは自然に立ち上がると思われるが、教師会を立ち上げようとする動きはない。

そこで、TJL_KKUは主に中等教育機関の教員を対象とした日本語教育ワークショップを実施することにした。ワークショップは、講師からの一方的な講義ではなく、参加者間の意見交換の場を重視し、その相互作用によって自らの実践を振り返ったり、新たな気づきを促すものだと考える。その目的は以下の3つである。

- ①東北タイ中等教育機関の日本語教員が自分の授業をふりかえり、授業の目標および活動を再考する。また、コミュニケーション能力を伸ばす授業方法を具体的に考える。
- ②TJL_KKU、中等教育機関の日本語教員の間で情報交換、意見交換を促進し、ネットワークを構築する。
- ③TJL_KKUの若手タイ人教員が日本語教員対象のワークショップの企画、運営を通じ、将来、自分たちが中心になってワークショップなどを行うためのイメージ作りをする。

内容は、「日本語初級の教え方」を中心に据え、できるだけ現場ですぐに役立つ内容を取り入れるようにした。TJL_KKUにとっては試行錯誤しながらの取り組みになったが、概ね目的に沿ったワークショップが提供できたと考える。2010年度に2回、2011年度に5回、2012年度

に4回実施し、3年間の参加者は累計438名、1回平均39.8名であった。本稿では、日本語教育ワークショップをどのように実施したかを紹介し、その成果と課題を述べるものとする。

2. 運営方法と内容

2.1 運営スタッフ

国際交流基金日本語専門家であるJ1とJ2が中心になり、ワークショップを企画した。運営（講師の招聘、広報、受付、招聘状、交通費、宿泊費補助の手続き、修了証、茶菓子準備など）はTJL_KKUの教員が担当した。ワークショップ当日は、TJL_KKUの学生にボランティアで受付、茶菓子の準備などを手伝ってもらった。

2.2 講師

国際交流基金派遣日本語専門家2名（J1、J2）が、他の講師と共同のワークショップを含め、全ワークショップ（114時間）の約76%（87時間）を担当した。当初はいろいろな機関から講師を呼ぶことを考えていたが、「初級の教え方」のワークショップができそうな講師を探すのが難しく、J1、J2が主に担当することになった。

TJL_KKU専任講師5名（J3、T1、T2、T4、T5）は約26%（30時間）担当した。TJL_KKU専任講師はみな若手教員であり、タイにおいては現役教師向けのワークショップを実施するには時期尚早という印象がある。しかし、現職教師向けのワークショップを展開していくことはTJL_KKUの任務であり、ワークショップは参加者がなんらかのテーマについて考え、意見交換をする場である。若手教員でも参加者の意見交換を促進するファシリテーター役ができるのではないかと考えた。

中等教育機関に派遣されていた国際協力機構青年海外協力隊の日本語教師1名（J4）にも計15時間（約13%）、会話の教え方を中心に担当してもらった。国際交流基金バンコク日本文化センター（以下、JFBKK）専任講師1名（T3）には、JFBKK開発教材の紹介をお願いした。第11回にはSuranari Wittaya Schoolの日本語教員（T6）に授業紹介をお願いすることができた。

表1 講師と担当時間数

教師	所属	担当時間数
J1	TJL_KKU, 国際交流基金日本語専門家	54時間
J2	Suranari Wittaya School, 国際交流基金日本語専門家	60時間
J3	TJL_KKU, 専任講師	3時間
J4	Ratchasima Witthayalai School, 国際協力機構青年海外協力隊	15時間
T1	TJL_KKU, 専任講師	3時間
T2	TJL_KKU, 専任講師	9時間
T3	JFBKK, 専任講師	6時間
T4	TJL_KKU, 専任講師	6時間
T5	TJL_KKU, 専任講師	9時間
T6	Suranari Wittaya School, 日本語教員	3時間

※J:日本人 T:タイ人

2.3 日程・開催場所

表2に示すように、コンケン大学教育学部で9回、ナコンラーシャシマーの Suranari Wittaya School で2回ワークショップを実施した。第1回、第2回、第7回は土曜日のみ、ほかは土曜と日曜の2日間開催した。遠方から2日間のワークショップに参加しようとする、移動に時間がかかり大変であるが、開催地から片道200キロ以上ある町からの参加者も少なくなかった。

表2 日程と開催場所

日程	開催場所
第1回 2010年10月2日(土)	コンケン大学教育学部
第2回 2010年11月27日(土)	コンケン大学教育学部
第3回 2011年5月21日(土)、22日(日)	コンケン大学教育学部
第4回 2011年7月9日(土)、10日(日)	コンケン大学教育学部
第5回 2011年8月6日(土)、7日(日)	コンケン大学教育学部
第6回 2011年11月19日(土)、20日(日)	コンケン大学教育学部
第7回 2012年1月28日(土)	Suranari Wittaya School
第8回 2012年6月30日(土)、7月1日(日)	コンケン大学教育学部
第9回 2012年8月18日(土)、19日(日)	コンケン大学教育学部
第10回 2012年11月17日(土)、18日(日)	コンケン大学教育学部
第11回 2013年1月19日(土)、20日(日)	Suranari Wittaya School

2.4 他機関との共催

国際交流基金ホームページの日本語教育国・地域別情報(2011年度)によると、タイ教育省は、タイ全土に27校の日本語教育推進センター校(以下、センター校)を定めている。センター校の役割は、周辺地域の学校と協力し、①学習者への日本語教育の推進、②日本語教師の教授レベルの向上、③必要な教材の調整や開発、を行うことである。TJL_KKUは、センター校である Udonpittayanukoon School、Ratchasima Witthayalai School の2校と計4回、ワークショップを共催した。セミナーをする際、TJL_KKUのワークショップを活用してもらえたいことである。ワークショップを東北タイの教員に認知してもらいたい機会となるし、ワークショップの目的でもある「ネットワーク構築」の幅が広がる。また、2012年度はJFBKK、JTAT、チュラーロンコーン大学、タマサート大学、コンケン大学の5機関が実施する「さくら地方研修会」と2回共催した。

表3 共催機関

第2回	Udonpittayanukoon School
第4回	Udonpittayanukoon School
第5回	Ratchasima Witthayalai School
第9回	さくら地方研修会、Udonpittayanukoon School
第11回	さくら地方研修会

2.5 手続き

広報は TJL_KKU のネットワークおよび東北タイ日本語教師メーリング・リストを通して行った。さくら地方研修会と共催したときは、JFBKK のホームページにもお知らせを掲載してもらった。メールおよび FAX で参加を受け付け、希望者に招聘状を準備した。タイでは教育機関を問わず、セミナーやワークショップへの参加は業務評価の対象となるため、ワークショップの全課程を修了した参加者には修了証を出した。第3回ワークショップから、国際交流基金の助成を受け、遠方からの参加者に交通費と宿泊費の補助を出した。

2.6 昼食および茶菓子

タイの学術セミナーでは、主催側が昼食や茶菓子を出す習慣がある。しかし、予算が十分取れないため、昼食や茶菓子の一部を参加者から徴収した。お弁当を準備したこともあったが、参加者が 50 人を超えると、準備が煩雑になるため、コンケン大学で実施するときは学生食堂で各自昼食を取ってもらうことにした。Suranari Wittaya School で実施したときは、周りに食堂が少ないため、Suranari Wittaya School に昼食と茶菓子を準備してもらった。

2.7 参加者

教育実習生を中心に、参加者累計 438 名、1 回平均 39.8 人の参加があった。2010 年度は 2 回実施、参加者累計 51 名（1 回平均 25.5 名）、2011 年度は 5 回実施、参加者累計 190 名（1 回平均 38 名）、2012 年度は 4 回実施、参加者累計 197 名（1 回平均 49.3 名）と、参加者は増加の傾向にある。

表 4 参加人数

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	累計	平均
年	2010		2011				2012				2013		
月	10	11	5	7	8	11	1	6	8	11	1		
教育実習生	23	19	22	16	20	18	6	29	16	36	26	231	21.0
タイ人教員	1	3	2	14	13	7	13	10	22	7	10	102	9.3
日本人教員	3	2	9	19	19	7	5	15	8	12	6	105	9.5
	27	24	33	49	52	32	24	54	46	55	42	438	39.8

2.8 内容

タイ中等教育機関では、授業の際、講義形式のスタイルで行われることが多いようである。特に経験の長い教員にその傾向が多く見られる。また、コミュニケーション重視の授業をしたいとする教員も、どうやっていいのかわからないという現状がある。そこで、ワークショップでは、実際の授業で役立つものを中心に講師から情報提供をし、体験や参加者間の情報交換、模擬授業を取り入れながら進めるようにした。

扱ったテーマは表 5 のとおりである。「初級の教え方」を中心に据え、①教室活動 (51 時間)、②文字 (24 時間)、③文法 (12 時間)、④発音 (12 時間)、⑤文化 (6 時間)、⑦教材紹介 (6 時間)、⑧教材作成 (3 時間) を扱った。

表5 ワークショップのテーマ

回	担当	テーマ	分類	時間
1	J1,J2	話す練習をたくさんしよう！ -基本練習のテクニク-	教室活動	6
2	J3	話す練習をたくさんしよう！ -導入-	教室活動	3
	J2	話す練習をたくさんしよう！ -応用練習-	教室活動	3
3	J1,J2	ひらがなとカタカナの教え方	文字	12
4	J2	文字に頼らない教室活動	教室活動	3
	J1	文法導入について考える	教室活動	3
	J2	教材作成について考える (絵カードを中心に)	教材作成	3
	J1	発音の教え方について考える (アクセントを中心に)	発音	3
5	J1,J2	基本練習について考える	教室活動	6
	J4	応用練習について考える	教室活動	3
	J1	発音の教え方について考える (イントネーション)	発音	3
6	J2,T1	文化の教え方について考える	文化	3
	J4	応用練習について考える	教室活動	3
	T2	漢字の教え方について考える	文字	3
	J1	て形の教え方について考える	文法	3
7	J2	会話練習までの授業の組み立てについて考える	教室活動	3
	J1	受身形、使役形について考える	文法	3
8	J2	導入について考える	教室活動	3
	J4	基本練習から応用練習までの授業の流れについて考える	教室活動	6
	J1,J2	ひらがな・カタカナの教え方	文字	3
9	T3,J2	『こはるといっしょに にほんごわあ〜い1』の使い方	教材紹介	6
	J4	教室活動集のアクティビティについて考える	教室活動	3
	J1	動詞の教え方について考える	教室活動	3
10	T2	漢字の教え方について考える	文字	6
	J2,T4	『こはるといっしょに日本語わあ〜い』文化編の使い方について考える	文化	3
	J1,T5	発音の教え方について考える ~母音の無声化など~	発音	3
11	J1,T4	文法の教え方について考える【~ている/ておく/てある】	文法	3
	J2,T5	文法の教え方について考える②【教えるときに教師がわかっていなければならないこと】	文法	3
	T6,J2	スラナリー・ウィッターヤー校の取り組み【授業紹介】	教室活動	3
	J1,T5	発音の教え方について考える【アクセント】	発音	3

3. 成果と課題

満足度を聞くアンケートは第3回から実施した。表6、表7を見ると、満足度は概ね高かったことが窺える。毎回いい雰囲気の中でワークショップを行うことができ、後述するように、「ふりかえりと再考」「コミュニケーション能力を伸ばす授業について考える」「ネットワーク

構築」という目的に沿ったワークショップになったと考える。

ここでは、ワークショップの目的①～③のそれぞれについて成果と課題をふりかえる。それ以外に、ワークショップを実施する過程で参加者の共通言語の問題にどう対処したか、ワークショップがタイ人教員にとって日本語のブラッシュ・アップの機会になり得るという気づきが運営側にあったこと、タイ人教員の授業紹介ができたことについても述べたい。

表6 2011年度アンケート結果 満足度 (第3回～第7回)

	参加者 累計	回答者 累計	とても よかった	よかった	あまり よくなかった	よくなかった	無回答
全体	190	150	90(60.0%)	59(39.3%)	1(0.7%)	0(0%)	0(0%)
タイ人教員	131	105	57(54.3%)	47(44.8%)	1(1.0%)	0(0%)	0(0%)
日本人教員	59	45	33(73.3%)	12(26.7%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)

表7 2012年度アンケート結果 満足度 (第8回～第11回)

	参加者 累計	回答者 累計	とても よかった	よかった	あまり よくなかった	よくなかった	無回答
全体	197	147	78(53.1%)	65(44.2%)	1(0.7%)	0(0%)	0(0%)
タイ人教員	156	107	61(57.0%)	43(40.2%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
日本人教員	41	40	17(42.5%)	22(55.0%)	1(2.5%)	0(0%)	0(0%)

3.1 参加者のふりかえりと気づきの有無

目的①についてであるが、アンケートにはふだんの授業との関連についてのコメントは少なかったが、「改めて自分の教え方を考え直すチャンスになった」「1つ1つのトピックについてじっくり考えることができ、普段浅くなりがちな思考を深めるクセをつけるのに良かった」「今まで疑問に思っていたことがつながって興味深かった。新しい発見がたくさんあったので、それを生かしていけたらいいなと思った。学生に知って欲しいが、どう伝えたら良いのか分からないトピックなど、また違った角度から見直して考えてみようと思った」などのコメントがあった。「自分の授業ならどうするか」を考えながら、ワークショップに参加している人は多かったと観察する。

また、コミュニケーション重視のスタイルへの気づきがあった参加者がいる一方で、実際に自分がそのような授業をするのは難しいと考える参加者もいた。ワークショップの内容をすぐに吸収し、模擬授業でそれを実践することができる参加者もいたが、どうしていいのかわからないという参加者もいた。それから、自分の授業を思い浮かべながら、どのように生かしていくか考えるのが難しい参加者もいたように観察する。しかし、たとえ目に見える結果に表れなくても、ワークショップに参加することで、いろいろな教え方、考え方に触れ、何らかの授業のヒントを得ていることを期待したい。

3.2 意見交換とネットワーク構築

目的②についてであるが、意見交換は活発に行われた。アンケートには「グループで考えることで意見交換できたり、他の方から学ぶことができた」「みなさんは会って、先生たちはいっしょに教え方を考えた。とてもよかった」「グループワークを通して、いろいろなアイデアを聞いてよかった。新しい知り合いができた」「多くの方と出会えて、共に活動できる貴重な場だと思った」「タイ人と日本人といっしょにワークショップをして、よかった。いろいろな経験をこうかんして、いい経験になった。それに、新しいともだちもできた」「いろいろなほかの人の意見がわかるようになった」など、意見交換を肯定的に捉えるコメントや、他の参加者から得るものがあったことが窺えるコメントがあった。

教師会の目的は、勉強会、情報交換、セミナー開催などがあげられるが、それらの役割の一部を TJL_KKU 日本語教育ワークショップが担うことができたと考える。教師会を立ち上げると運営面などの問題が生じるが、TJL_KKU が主催することで、運営の問題もなかった。

ワークショップはコンケン大学のほかに、ナコンラーチャシマー県にある Suranari Wittaya School でも実施した。各会場で、グループ・ワークや休み時間、ワークショップ終了後に参加者が交流したが、そこで一時的なものかもしれないが、小さなネットワークが形成されたと思われる。表 8 に示すように、2回以上参加したリピーターは、2011年度は 45 人、2012年度は 63 人いた。アンケートに「先生がたはセミナーに参加していた人の名前を覚えている。とてもうれしかった」というコメントがあったが、1度会い、顔と名前を覚えるだけでも輪が広がる。ワークショップで知り合った先生方と、中等教育機関の日本語キャンプやスピーチ・コンテストなどのイベントで会うことも多く、それを繰り返しているうちに、日本語教員仲間の輪が広がっていく。時と場所に応じて、いろいろな立場の人と形成される小さなネットワークは、東北タイという広大な地域に合っているかもしれない。ワークショップを実施することで、従来の「教師会」とは違った、「形のない教師会のようなもの」を形成する場を提供できたと考える。

表 8 参加回数

	2011年度			2012年度		
	タイ人	日本人	合計	タイ人	日本人	合計
5回参加	5	0	5			
4回参加	8	3	11	4	1	5
3回参加	7	5	12	11	2	13
2回参加	10	7	17	33	12	45
1回参加	28	18	46	41	8	49
合計	58	33	91	89	23	112

また、東北タイには日本語教育機関が点在しており、他の教師との情報交換が難しいし、教材も手に入りにくい。授業時間が多く、授業以外の雑務などで多忙な中で孤軍奮闘している教員が多い。また、中等教育機関に赴任したばかりのJTの中には、慣れない外国生活を送る中、仕事がかまきかなかったり、環境に溶け込めなかつたりして、精神的に参ってしまう者もいる。しかし、ワークショップに参加し、同じような立場の教員と会い、話すだけでも、気持ちがほぐれることがある。教員同士の交流が状況改善や解決策を考えるきっかけになると観察する。

ワークショップにはTJL_KKUの教育実習生が多く参加した。教育実習生は将来、タイの日本語教育を担う可能性のある人材である。ワークショップへの参加は、教育実習校以外の現任教員と接することができるいい機会となっている。一方、アンケートに「毎回私自身にとって、特に教育実習生との話し合いが勉強となっている」と書いた教員がいた。現任教員も教育実習生から学ぶ点もあると考えられる。立場や世代を越えたコミュニケーションや相互作用が生まれたことが観察された。

3.3 TJL_KKU 若手教員の意識

目的③についてであるが、報告者を含むTJL_KKUの若手教員(J3、T1、T2、T4、T5)は、ワークショップの運営やワークショップの講師の経験を通して、東北タイの中等教育機関の支援のありかたや可能性について考えることができた。そして、多くの先生方の力を借りながらになるだろうが、今後もワークショップを運営していけそうだというイメージを持つことができた。

タイでワークショップ等を実施するにはスタッフが大勢必要だと思われがちだが、スタッフが4～5人でも、参加者50人規模のワークショップができること、ワークショップという形で東北タイの日本語教育界に、わずかながらではあるが、貢献できることもわかった。そして何より、ワークショップを通じて多くの日本語教員と知り合うことができ、ネットワークが広がった。このネットワークは今後いろいろな局面で生かされていくと思われる。また、課題はあるものの、参加者同士のやりとりを重視したワークショップを組み立てることができた。今後も東北タイの日本語教育支援のありかたを考えながら、ワークショップを運営していきたい。そして、いろいろなタイプのワークショップの講師に挑戦していけたらと考える。

3.4 共通言語の問題

グループ活動を多く取り入れ、いろいろな立場の人と話せるよう、グループを作るようにしたが、グループ内で、タイ語で話しか、日本語で話しかが問題になることが少なからずあった。タイ人教員の日本語力、日本人教員のタイ語力が不十分で、共通言語がない場合に起こる問題である。他の人の意見がわからず、話し合いが深まらないと、ストレスになりやすい。また、日本語でのワークショップのときは、タイ人参加者から「日本語だとわかりにくい」、タイ語で

のワークショップのときは、日本人参加者から「タイ語だとわかりにくい」という声が出た。

グループ分けについては、たとえば、タイ人教員から「タイ人と日本人といっしょにワークショップをして、よかった。いろいろな経験を交換して、いい経験になったと思う」という声がある一方で、日本人教員から「タイ人だけ、日本人だけでグループ分け」を望む声があったりした。どう感じるかは人によるが、ネットワーク形成等を考え合わせると、できれば「タイ人と日本人は別作業」と決めてしまうのは避けたい。もちろん「日本人だけ」のグループがあってもいいが、目的によるだろう。可能なかぎり、いろいろな立場の人が話す場として、グループ・ワークが機能するよう、工夫していきたい。

第10回、第11回のワークショップは、一部日タイ両言語でワークショップを行ったが、時間はかかるものの、スムーズであった。今後、日タイ両言語のワークショップを増やしていくようにしたい。

3.5 日本語のブラッシュ・アップの機会提供

大学にいたときは日本人教員の授業を受けるなど、少しは日本語を使う環境にいた教育実習生が、日本人教員がいない学校で教育実習を始めると、どんどん日本語を忘れて行くのに驚かされることがあった。教育実習生から「ワークショップに来て、ひさしぶりに日本語が使えて、よかった」という声も聞かれた。教育実習生がこのような状況であれば、日本語学習環境から離れて長い現任教員はなおさらであろう。多くの中等教育機関のタイ人教員は日本語能力試験のN4レベルに合格しており、N3、N2レベルを目指して勉強を続けているが、実はN4レベルをキープすることも重要である。ワークショップで少しでも日本語を聞いて話すことで、自分の日本語力を確認したり、日本語学習の新たな目標を見つけたいと考える。また、教員の日本語能力向上、日本語のブラッシュ・アップ等を目的としたセッションを実施することも検討したい。

3.6 タイ人教員の授業紹介

ワークショップ企画当初から、中等教育機関のタイ人教員に授業紹介をしてもらいたいと考えていたが、なかなか難しく、第11回でやっと実現した。授業紹介を引き受けてくれたT6は、報告者の1人であるJ2と職場が同じで、ティーム・ティーチングをしていた。J2はT6と授業をする中で、「T6の授業実践をほかの人にも紹介したい」と強く感じ、T6にワークショップの講師を依頼するに至った。

内容は、ひらがなの導入方法、読解、歌の活用、形容詞の導入方法、はっぴ作りで、参加者に授業体験をしてもらった。現役のタイ人教員は自身の授業でどのように生かせるかを考えながら参加していたし、教育実習生も多くの授業のヒントを得ていた。また、日本人教員も、タイ人教員の教え方を知るいい機会になった。

T6には授業紹介をしてもらえたが、授業紹介を自らしようとするタイ人教員はあまり多くないと思われる。今後、できるだけ多くの先生に声をかけ、授業紹介してもらえるようにしたい。そして、ワークショップの参加者に「自分も授業紹介をしたい」と思ってもらえるような雰囲気

気作りをしていきたい。

4. おわりに

2010年10月に試みとして始めた日本語教育ワークショップを、これまで11回開催できたことを、参加者、関係者のみなさんに、改めて感謝したい。ワークショップでは、日本語の初級前半を中心に、できるだけすぐに授業に役に立つ内容を扱うよう努めてきた。参加型のワークショップとしてどんな内容が望ましいか、いろいろと試してきたが、多くの参加者と意見交換、情報交換する中で、講師、参加者、運営側がともに学ぶことが多く、有意義であった。ワークショップを実施する上で不十分な点もあったし、ワークショップでの共通言語をどうするかなどの課題もあるが、それらの解決を目指しつつ、2013年度以降も実践的な内容で、ネットワーク形成の一助となるようなワークショップを続けていきたい。そして、ベテラン教員から、若手教員、教育実習生、教師を目指す大学生まで、タイ人教員にも日本人教員にも、「ワークショップに参加したら、なにか学べるだろう」「日本語の練習にもなる」「みんなに会えるから、参加しよう」などと考えてもらえるようなワークショップを展開していきたい。

注

- (1) 白鳥(1999)によると、イーサーン日本語教師の会は1997年度から1998年度にかけて、計8回勉強会をしている。
- (2) 花井(2000)によると、ウボンラーチャターニー日本語教師の会は1998年度に計4回勉強会をしている。
- (3) 北タイ日本語教師会のホームページによる。

参考文献

白鳥文子(1999)「イーサーン日本語教師の会 実践報告」『国際交流基金バンコク日本センター紀要第2号』

花井慎行(2000)「ウボンラーチャターニー日本語教師の会」『国際交流基金バンコク日本センター紀要第3号』

北タイ日本語教師会ホームページ「『北部タイ日本語教師会』の2012年の活動方針について2012年6月13日」<<http://www.geocities.jp/hokubutaikyoshikai/katsudo.htm>> 2013年3月25日
国際交流基金ホームページ 日本語教育国・地域別情報 2011年度 タイ
<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/thailand.html>>2013年3月25日